

〈書評〉

鈴木幹雄著

『20世紀ドイツにおける造形表現研究と発想法教育学

—シュトゥットガルト、バウハウス、イッテンの系譜—』について

(風間書房, 2020年刊, 268頁, 7,500円+税)

大関 達也 (兵庫教育大学)

著者、鈴木幹雄氏は、2001年に著書『ドイツにおける芸術教育学成立過程の研究—芸術教育運動からG・オットーの芸術教育学へ—』を出版したが、その基本設計図は1999年に広島大学に提出された博士論文『G・オットーの初期著作における自己探求的な芸術教育学理論の基礎づけについての一考察』にあった。そこでは、ドイツにおいて自己探求的芸術教育学が、1950年代後半から1960年代中葉にかけての時期にいかに創り上げられていったが解明されていた。

1960年代に形成された自己探求的教育観は、現代のプロジェクト・メソッドや「主体的・対話的で深い学び」(中教審)に通じるものである。このことは、私たちにとって興味深い関心事項である。今回紹介する鈴木氏の研究書は、さらに1920-30年代の時期に、ドイツ語圏内において自己探求的教育学のコンセプトの原型が形作られていた実情を見せてくれる。

同書では、20世紀における芸術学校・芸術大学改革がワイマールと並んで、南西ドイツのシュトゥットガルト、同アカデミーの改革的精神によってバウハウス教育学の骨格が温められ、形作られていった経緯が解明されている。第1章と第2章では、まず、①ヘルツェル、並びにヘルツェル門下に位置する中心的芸術家・芸術学校教授達を取り上げ、シュトゥットガルトにおいて、ヘルツェル学派的改革の伝統がいかなる端緒からいかに形作られたのか、またその中で芸術アカデミー改革の内在的視点がどのよう

に構想されたかが研究されている。さらに、第4～6章、並びに第8章では、②シュトゥットガルト・アカデミーの改革的伝統との接点で、バウハウス教育学とバウハウスにおける導入教育(学)＝発想法教育学がいかに成立したかが解明されている。①と②は、これまでわが国の研究者が入りこめなかった領域である。

ヘルツェルは個々の著述をも含めて、自らの論述を必ずしも公開しなかったにもかかわらず、約十数人の教え子が行った口述記録が残されている。ヘルツェルの講義の実践は、早い時期からなされ、授業の中に、様々な材料を挑戦的に用いるよう鼓舞された。それらは、ヘルツェルの主張する「実験すること・試すこと Erproben」という探求活動から生じたものであった。ヘルツェルは授業で、色彩の諸現象に取り組んだが、その際彼は色彩を対象物の一特性として理解するのではなく、表現活動の本質的な構成要素と位置づけた。その後ヘルツェルは授業でコラージュに取り組んだが、コラージュという新テクニックに留まるのではなく、色彩コントラストを活用した空間造形の研究に挑戦した。実際その後彼の作品には、彩画されたステンドグラスの特徴が取り入れられていく。

本書の全体を通じて、著者の興味深い歴史叙述と図版は、今日までみずみずしい生命を持ち続けてきたバウハウス教育学のエネルギーを十分に感じさせてくれる。